

透明に「なる」

杉浦真紀子

(幼稚園教諭)

日頃、保育をしていると、子どもが何かになりきって遊んでいる姿をよく見かける。ままたまごとのお父さんやお母さんになって大人っぽく振る舞ってみる、「アナと雪の女王」のエルサになって情感豊かに歌う、ウルトラマンになつて怪獣とおぼしき相手に立ち向かう……

などなど。自分の好きな人や憧れのキャラクターになりきっているときの子どもは、なんて生き生きとしているのだろう。まるで、自信たっぷりとその役柄を生きているようでもある。子どもたちは、何かに「なる」ことで、なりたい自分に一歩一歩近づいているのかも

しれない。しかし一方で、なりたいと強く願っているわけではないのに、そう「ならざるを得ない」こともあるのだということを考えさせられる出来事があつた。

四月、年少から年中へと進級したS子。私は三月に年長児を卒園させたところで、新年度からはS子のいる年中クラスの担任となつた。S子の元担任は同学年の隣のクラスへと持ち上がり、私としてはとても心強く感じていた。

S子は登園すると、隣のクラスのH夫と、

どちらからともなく互いの姿を探しては一緒に過ごすことが多かった。昨年は同じクラスでとても仲が良かったと聞いていたので、クラスが離れてしまつて心細いのだろうと受けとめていた。しかし、常に二人きりというわけでもなく、時には他の女兒のままごとに加わつて遊んでいたし、特に何かが困つたといつて担任を頼ることもなかつたので、しばらく様子を見守るつもりでいた。ただ、降園前の集まりのときだけは、「先生の隣がいい」と言つてひざの上に座つたり、触れ合いを求めたりしてきたので、そんなときは大切にかかわろうと考えていた。

五月、生活や遊びの様子が少し落ち着いてきた頃、隣のクラスの担任と、子どもたちの様子について話をしていった。そこでS子について、こんな話題が上がつた。「S子とH夫が不安げに寄り添つて過ごしているようで気に

なる。担任として何とかかかわつていきたい」と。私自身、気になりつつも踏み込んでかわれずにいたことに、はつとさせられた。そして、S子とH夫は一体どんな思いで過ごしてきたのだろうと、今度は胸がときどきして、居ても立つてもいられなくなつた。

その翌日のことである。園庭に出てみると、S子とH夫の二人が、丸太に座つてひそひそと話をしている。一見、ひっそりとしているようだけれど、庭のど真ん中に座つていて、まるで、こちらからの働き掛けを待っているかのようにも感じられた。そこで、思い切つて声を掛けてみる。

「何してるの？」

「いいから！ 私たち、透明になつてることだから、見えてないってことなの」

「ごめん、気がつかなくて。透明になつてることが、わかるとよかつたんだけど」

S子の言葉からは「私たちのことは、そっ
としておいて」という意味合いが感じられた
が、私としても、S子とつながるチャンス
を逃すわけにはいかなかった。

「透明になれる方法があるかもしれないから、
一緒にやってみようよ！」

この言葉に二人の表情が少し変わったこと
が見てとれた。そこで一緒に保育室に戻り、
製作用の机に向かったが、混み合っていたの
で、そばにままごと用の机と椅子を運んでき
て、二人のための特等席を作った。二人はと
てもうれしそうなお様子で、これから何が始ま
るのかと、気分が盛り上がってきたようだっ
た。

「透明」という言葉から連想し、まずはビニ
ール袋を目の前でひらひらさせてみた。

「わあ、ほんとに透明！」

喜んだS子は、それを頭からかぶろうとす
る。



「息ができなくなりそうね」

「じゃあ、切ったら？」

「これくらい？」

「顔が隠れるくらい」

「お面みたいにしたらどう？」

などと話し合いながら、最終的には（紙製の）
お面のベルトに透明なビニールを付けただけ
の、シンプルなものができあがった。そして
相談の末、ビニールが顔にかかっていると

は透明になっているということ、ビニールが上に上がっているときは透明じゃない、つまり姿が見える、ということになった。S子がビニールを上げたり下げたりするたびに、

「あれ、Sちゃんがいなくなつた!」

「あ、いつの間にか出てきた!」

とやりとりをしていると、その様子を見ていた友達が、同じ物を作りたいとやって来た。

「こうやって作るんだよ!」

と、S子は友達にそのお面を見せてあげると、勢いよく園庭へと飛び出していった。

環境が大きく変化する中で、不安に揺らぐ自分を保つために「透明」にならざるを得なかったS子。しかし、お面を作ったり試したりしながら、透明になるということが楽しさへと変わっていったとき、S子の体は安心感を得て、思わず動きだしたのではないだろうか。

子どもは、何かに「なる」ことで、自分の不安や危機的な状況を表すこともあるのだと、改めて気付かされる。そんな子どもたちの心の在りようを受けとめ、一人ひとりが安心して自分らしさが発揮できるよう、支えていけたらと思っている。

